

東洋學報 第五十七卷第一・二号 昭和五十一年一月

論説

『三十頌』『性入法』の成立時期をめぐって

——Thon mi sambhoṭa の生存年代——

山口 瑞 鳳

はじめに

チベットの一般的な伝承によると、チベット文字は Sron btsan sgam po 王の大臣 Thon mi Sambhoṭa が創制したものであり、同じ人物によって、チベット語の基本的文法を示す *Sun cu pa* 『三十頌』と *rTogs kyi htingpa* 『性入法』が書かれたともされている。

チベット文字が七世紀中頃用いられていたことは、ほぼ事実として確認されるが、Thon mi Sambhoṭa と云う個人の手になるかどうかは確かでない。この名が Sron btsan sgam po の大臣として敦煌文獻の中に見えないからである。更に、その手になるとされる二篇の文法の規定が、八世紀末の中央チベットの碑文に適用出来ないと云

う事実があるので、それらの事実の意味するところをここに点検してみたいと思う。

I

敦煌文献の吐蕃王家『年代記』には、Shan shun 討伐の祝宴の記述に続いて、Khri sron brtsan 一代の事績を讀えた一節が示される。そこには (DTH, p. 118, l. 16-24)

/bod la sna na yi ge myed pa yan/ /bsan po hdi hi tshe byun nas/

チベットに以前文字はなかったのであるが、この王の時に出来て

とあって先ずチベットの文字について、Khri sron brtsan W (= Sron btsan sgam po) の時に出来たことを明らかにしている。また、『編年紀』の六五五年の条 (DTH, p. 13, l. 26-27) に、

blon che ston rtsan gyis /ngor tir bkag khriims gyi yi ge bris phar lo gcig/

宰相 [mGar] sTon rtsan が、hGar にて欽定大法の文字を書いて、一年。

とあり、六五五年には文字があったことを示している。これは、Khri sron brtsan 死後六年のことであるから、この王の時代に文字が出来たことを疑う必要はない。『旧唐書』(一九六吐蕃伝上) では mGar sTon rtsan について「雖不識文記」としているが、或いは、初めて唐を訪れた頃の大臣は未だ文盲であったのかも知れない。同じく『旧唐書』吐蕃伝の冒頭には「無文字」刻木結繩為約」とあるが、Khri sron brtsan 以前の吐蕃を云ったものであらう。

『編年紀』は、六四〇年以降の事件を述べ、六四九年以後は毎年の記録を簡条書きで伝える。また、Thomas が示した文成公主に関する文献 (TLT, II, p. 8-10) は、Thomas によれば六三四年から、著者の所見では六三五年からであるが、六四三年に至る毎年の記録の体裁をとるものである。これらは、口伝と見るより、文字に書かれて伝えられたとみなす方が自然のようであり、六三〇年代に既に文字があったとすべきであろう。⁽¹⁾

この文字について、Bu ston がその仏教史の中で次のように (SRD, f. 118b, l. 5-6) 云う。

de las bod la yi ge med pas/ thon mi a nuhi bu hkhor bcu drug dan bcas pa yi ge slob tu btañ bas/ pañdi ta lhahi rigs sen ge la sgra bsłabs te/ bod kyi skad dan bstun nas gsal byed sum cu/ a li bshir bsduś te/ gzugs kha chehi yi ge dan bstun nas/ lha sahi sku mkhar ma rur bcos nas/ yi ge dan sgrañi bstan bcos bryad mdzad de/ rgyal pos lo bshi ru mtshams bcađ de bsłabs so/

それ(外国からの便り)以外チベットに文字がなかったのじ、Thon mi A nuhi bu を供一六人と一緒に文字の修得に遣わしたが、パンディタ lhahi rigs sen ge のもとで文法を学び、チベット語にあわせて、子音字三〇、母音記号四にまとめ、形をカシニール文字に倣って、lha sa の御城 Ma ru じ手直⁽²⁾した後、文字と文法との八論⁽³⁾をつくり、王は四年(城に)籠ってそれを学んだのであった。

『年代記』の記述には、誰によって文字が創制されたかは全く示されない。しかし、Bu ston は Thon mi A nuhi bu の名を示し、lhahi rigs sen ge に学んだこと、カシニールの文字に倣ったこと、更に、文字の他に文法書を残したことを伝えている。

同じくが *rgyal rabs gsal ba'i me lo'i* (GSM, f. 29b, l. 6-f. 31a, l. 6) や *Thon mi Anuñi bu/Thon mi Sambho ta* の名のもとで見え、出かけた場所が南印度に、師の名が婆羅門 *Li byin* として示される。更に *Lañsha* 「神の文字」と *Wartula* 「竜の文字」の名が、*dbu can* 文字(楷書体)と *dbu med* 文字(行書体)夫々の原型として指示される。著作に関しは、*Thon mi mdo rdzi* の *sGra mdo* という名があげられる他、*pañdita lHa rigs sen ge* のもとに学んだ翻譯者として紹介され、観音に関する二の訳業があることも加えられる。⁵⁾

Bu ston (SRD, f. 119a, l. 6-f. 119b, l. 1) と *Hu lan deb ther* (HLD, p. 16b, l. 9-p. 17a, l. 1) は一樣に *lo tsā ba Thon mi Sambho ta* の名々の弟子 *Dharma koça* 及び *lHa lun dPal gyi rdo rje* (*Bu ston* は *rDo rje dPal* とする) と共に別記⁴⁾している。

既に述べたように、敦煌文献には、*Sron btsan sgam po* の大臣として、*Thon mi Sambho ta* はもとより *A nuñi bu* の名も見えない。上記の書物に見えた *Thon mi Sambho ta* は *“lo tsā ba”* 「訳経者」といふ、*“mdo rdzi”* 「經の司」⁶⁾と云い、經の翻譯にたずさわったものの称であるのに注意したい。

チベットの後代の人々にとって、*Sron btsan sgam po* 王は観音の化身であり、仏教の偉大な推奨者であったと信じられている。従って、この時代に観音に関する經典の翻譯が行われたとする記述は、彼らにとって何の疑念もはさまず受け入れられるわけである。しかし、今日の学問的な検討を経て語られる *Sron btsan sgam po* には、仏教の推奨者としての側面は皆無に近い。⁶⁾とすれば、この頃、訳経僧がいて、大いに訳経が行われたという可能性

める。(7)

る。(9)

f. 65b, l. 6–f. 66a, l. 1)°

5

ba sña :

インダの学者 Li byin とチベット人の Thu mi hBri tho rigs A nu が文字を学び学者となった。インド文字は五〇であるが、チベットの文字は三〇で足りると知った。カンティールの学匠 A nan ta を招いて白蓮華經と……など訳経師 Thu mi Sam bho [ta] が訳した。「これが」チベットに於ける正法の翻訳の初めである。

右の文中 Thu mi hBri tho rigs a nu とするのを全く新しい形であり、同じく A nuhi bu ではなく、A nu との間の ⁽²⁾は ⁽²⁾だ、Thon mi sambho ta ではなく、Thu mi sam bho とする ⁽²⁾は ⁽²⁾ bKaḥ than sde bha だ gter kha (埋藏本) であり、綴字は屢々敦煌文献所伝のものに近う形を示す場合もあるが、Thu mi だ Thon mi の崩れた音から成る文字であり、敦煌文献では mThon myi、伝承では Thon mi とする ⁽²⁾。Anu だ A nuhi bu だ Sam bho だ Sambhoṭa と相当する ⁽²⁾。hBri tho rigs だ hbrin to re の称を思わせる。Yar luñ 王家の宰相 mThon myi hbrin po rgyal btsan nu と連想させるが、それ以上結びつけることは出来な。

ただ、同じ Kha che jo bo Ananta の名を見る ⁽²⁾ 先の lHa luñ dPal gyi rdo rje の名と共に注目すべき ⁽²⁾ は ⁽²⁾ Kha che Ananta 及び Āntarakṣita が最初に米蔵した時に通訳をした (BSS, p. 16, l. 11, KGG, f. 81a, l. 4; BSS, p. 17, l. 9., KGG, f. 81b, l. 3) 訳経事業にも参加した (BSS, p. 52, l. 2-3) ⁽²⁾ sGru sbyor bam po gñis pa だ ⁽²⁾ lCe khyi hbrug と並べ言及する ⁽²⁾ (GBN, f. 2b, l. 1) である。 ⁽²⁾ は ⁽²⁾ Thon mi Sambhoṭa は八世紀後半から九世紀前半に在世したと見なけ

ばならないのである。Kha che Ananta を介して、Thon mi Sambhoja と Ice khyi hbrug の両者が並び、共に文法学者であるところから同一人として両者を結びつけたくなるのであるが、現存史料によってそのような結論はまだ引き出せない⁽¹⁶⁾。

以上に示すところから、Khri sroñ Ide brisan 時代の訳経者であり、文典家であった Thon mi Anuñi bu, Sambhoja が、誤って bisan po Sroñ Ide bisan になり、Sroñ bisan sgam po 時代にもってこられたのではないという疑惑が強くなる。他方、「インド文字は五〇であるが、チベット文字は三〇で足りることを知った」とあるところから、チベットの文字に関する、文法綱要『三十頌』の著作と三〇文字そのものの創制が誤り伝えられたのではないかと云う新たな疑念も生れてくる。

今日では、三〇の文字を創制したのも、*Sum cu pa* 等の文法書の著者も Thon mi Sambhoja であってあやしまれないが、この著者が Khri sroñ Ide bisan 代の人物であれば、文字の創制とは関係がないことになる。今日、slob dpon A nu の著作として bsTan hgyur に収められている一部の文法書 *Sum cu pa* や *rTags kyī hñug pa* とは、Bu ston によって Thon mi Sambhoja の著であると信じている (SRD, f. 199a, l. 2)。また、「一世紀頃、既に文字の創制者としての Thon mi 像も出来上り、Sroñ bisan sgam po 時代の文字の創制について語るとき、その名が挙げられたものと考えられる⁽¹⁷⁾。この(両著) *Sum rtags* が Khri sroñ Ide bisan 代に成立したと云うためには *Sum rtags* の内容についての検討が必要になるが、この方は後段に詳説するところとして、次に、*rgyal rabs gsal*

bahi me lon (GSM, f.31a, l. 4) とは、Thon mi mdo rdzi とは、*sGra mdo* など、の二つについて検討してゐる。8

そこには、Thon mi の創制とされる文字そのものの構成について略説した後、

rgyas par hdod na thon mis/ dan po yi gehi mnam hgyur gyi bzo brtsam/ ka smad sum cur bsgyur/
sdeb sbyor bsgrig pahi gshi ma/ thon mi mdo rdzihi sgra mdo bya ba yod k'ris de dag la 'gzigs cig/
くわしへ「知らうと」欲するならば、Thon mi とは、いふ、なほ、いふ文字の各種の形が考案され、Ka ㄱ ㄷ ㄴ ㄹ
○字とされて、綴字を整合させる基本「を示した」Thon mi mdo rdzi の声経といわれるものがあつた、

それらを御覧頂きたい。

と示してゐる。

ここで“sgra mdo”といふのは「文法書」といふ普通名詞で、これはThon mi mdo rdzi を冠する、と特定ものを示したと考えられるが、稲葉正就氏はこれを書名と取つてゐる。⁽²⁾尤も、dPaṅ gtsug lag hphren ba ㄱ Thon mi mdo rdzi の *sGra mdo* 及び *Sum rtags* と書つて、Bu ston の云ふThon mi の「八論書」の、と数えつてゐる(KGG, f. 16b, l. 1)。しかし、Bu ston は *Sum rtags* 以外を知らなかつた、から(SRD, f. 199a, l. 2-3) *gSal baji me lon* 及び “sgra mdo” とした、は、たゞ、の、た、かゝ、dPaṅ gtsug lag hphren ba の、断は正しくない。というのは、上記の引用文には“sgra mdo”と書いた後に“de dag”「それら」といふ双数または複数を示す言葉があり、「それら」の参照を薦めてゐる、ので、Thon mi の文典類一般といふ意味で“sgra mdo”を用いてゐることが知られるからである。

この“sgra mdo”の内容として挙げられているのが「綴字を整合させる基本」であるから、*rTags kyi hjug pa* が中核ということであろう。ここで気づくことであるが、この論書も、実質的記述が四句一偈の構成をもった三〇の偈から成り立っているのである⁽¹⁸⁾。

チベットの文字は三〇の字から成り立っているが、チベットの文字の綴り方の根本を説いた *rTags kyi hjug pa* も三〇の偈から成り立っている。この事実と、三〇の文字の創制説とが短絡したのではないかと考えられ、その方が、『三十頌』と云う表題との短絡⁽²¹⁾のみを考えるよりも現実的な解釈かも知れない。

II

ここで、文字の創制者とされてきた *Thon mi Samboja* について、同時にその著作とされる *Sum cu pa* と *rTags kyi hjug pa* の内容を検討し、この著作の成立した時期を確認することにした。

Sum rtags と一括して呼ばれることもあるこの文典の、はじめの部分、即ち、*Sum cu pa* は、チベット文字を先ず分類したのち、各種の「辞」を紹介して、その働きと、稀に連声規則も示し、終りの方では、指示代名詞“*de*”と疑問代名詞“*gan*”の説明にまで及ぶもので、後段で見ると、*rTags kyi hjug pa* に較べると、叙述が粗であり、内容的に全く不整合な印象を残すものである。これに対する *rTags kyi hjug pa* は、字の分類と性別とから始められる。後接字、前接字をとり出し、後者にもまた性を指定する。これによって綴字の法則を一括し、更に、動詞、形容詞等の働きも規定する。この後に、後接字に三つの性を指定し、再後接字の附き方を定めた上で、接尾

辞の取り方を規定する。更に、格助辞と助辞一般の働きを列挙し、概説した後、三〇字と母音記号の結合にすべてが依存していると結んでいる。

rTags kyi hying pa は、それ自体で一つの完成した“*sgya mdo*”であり、終始一貫した緊張が感じられ、不整合を洩さない。この点は、後に触れるが、R.A. Miller 氏の意見に同調するものである。

今、*Sum rtags* の著者 slob dpon A nu が、Bu ston の云々という Thon mi Samchoja であり、文字を創制した A nuhi bu と同じ一人であるならば、*Sum rtags* に示された規定は、当然、文字が出来そめた Sron btsan sgam po の時代からあった筈である。規則があれば、一般に、その後のチベット文に適用されている筈であるが、Khri sron lde btsan の晩年に近く刻まれた Shol の石柱碑文では、*Sum cu pa* の示す属格助辞の連声規則が一部守られていないのである。また、一部の敦煌文献、例えば『編年紀』では、この規則は全然守られていない。*rTags kyi hying pa* の規定もそこでは無視されているのである。⁽⁸²⁾ 敦煌文献については、それが辺地で写されたところとど、写字生の教養とどういふ問題になるが、Shol の石柱碑は Khri sron lde btsan (742—797) の敕許によつて Lhasa の Shol に樹立されたものであり、敦煌文献について云えることを繰り返しても通用しない。

Khri lde sron btsan (777—815) 王の時代に、いわゆる *Mahavyutpatti* 『翻訳名義大集』という語彙集が編纂され、この書によつて經典翻訳語が統制され、いわゆる“skad gsar bcaid”「新訳語の採用」が行われた。その時期は *Mahavyutpatti* の補巻に示る *sgya sbyor bam po gnis pa* の冒頭と巻末に示されるところから八一四

年のことかと考えられる。⁽²⁴⁾ チベット⁽²⁵⁾の所伝がこれを *Khri gtsug lde brtsan* (806—841) 代とするのは誤りで、この点には *Tucci* 氏によつて明かにされてゐる。⁽²⁶⁾

この「新訳語の採用」は、*Pad ma dkar po* の仏教史 (TPG, f. 102a, l. 6-f. 103b. l. 3) に *sGra sbyor bam po gñis pa* (GBN, f. 2b, l. 1-2) に *byā ka ra nāhi lugs dan mi mthun tel mi bcos su mi run ba nams kyan bcos* 「*byā ka ra nā*」に示された方式と一致しないので、修正せざるを得ないものなども修正したと示してゐる。この *byā ka ra nā* と同じのは *Sum rtags* の梵語表題 *Byā ka ra nā mā la trin gad*, *Byā ka ra nā lin gā ba ta ra* を併せた上、略して云つたものと思われる。⁽²⁸⁾ *Sum rtags* の成立は「新訳語の採用」よりは古と云ふことになる。

今、稲葉正就氏の研究によると、*Thon mi* 文典の叙述の型から、その文法学の系統は *Katantra* 派の流れを汲むと云う。稲葉氏は、更に、次のように述べている (『チ古文』, p. 13)。

トンミが『性入法』として別出して論じたのは、『三十頌』に於ける連声を説明するために文字の性分類をしたものが必要であり、そこにチベット語文法として独自の点があるからであらうが、何かそこに *Liṅgmuṣṣama* (性の教へ) の如き文法書が手本となつてゐるのかもしれない。尤もカータントラ派に於て *Liṅgmuṣṣama* の作者は *Durgātma* に帰せられ、*Durgasinha* とは異つた後の人であるようであるから、トンミよりは後代の著作であることになるであらうが、しかしトンミの時代に何かヒントになるものがあったのかもわからない。

この一文による限りでは、⁽²⁸⁾ 稲葉氏は *Thon mi Samboḥa* を一応 *Sron btsan sgam po* 時代の人物とみとめた

のものを疑っていない点は稲葉氏と同じである。Thon mi について、文字の体系を整理したか、文字そのものをもたらしただかのいずれかと考え、Sum tags の著作については、『むしろ Thon mi に名を借りたものと見るのである。その点、筆者の結論と全く逆になるわけである。

稲葉氏が rTags kyi hjug pa に新しい傾向を認めている点を受けて、rTags kyi hjug pa には「新訳語採用」以後の特色を認め、Sum cu pa にはそれ以前の特色を託し、二著作を分けた上、Thon mi Sambhoja 乃至は Ami hi bu を仮空の人物としてしまう意見が R.A. Miller 氏によって示されている⁽⁸⁾。やゝ立ちいることになるが、同氏の意見を批判しながら著者の拠るところを詳説して見た。

III

Miller 氏が Thon mi の存在について、中国史料にいう吐渾弥や、『編年紀』に見える Thoñ myi との同一視を拒否するのは正しいが⁽⁹⁾、Thon mi を hThon mi と書いたり、mTho mi と示したりする事実に触れる場合に、史料を恣意に選んでいるのは理解できない。もし古典時代の記録でその綴字を確かめようというなら、Bu ston の他では *Hu lan deb ther* と *rgyal rabs gsal bahi me loñ* と *Atča* の *gter kha* と⁽¹⁰⁾、*Ka bkaol ma* なら⁽¹¹⁾といったもので議論すべきである。況んや他の研究書の引用文によっては何も云えない筈である。上記の書物ではいづれにも “Thon mi” とのみ示れ⁽¹²⁾、Miller 氏の云った⁽¹³⁾形の “pñhun” や “mñhun” は導き出すべくない。まして “mThon myi” が、『宰相記』に出づる宰相 mThon myi hbrin po rgyal mtshan nu(DTH, p.

100, 1. 18; p. 101, 1. 15-16) の名に、その妹 mThon myi za Yar sten の名 (ibid, p. 100, 1. 19) を加へて氏族名であることが確認される場合、これを “Thon mi” の古形とするのは如何なる躊躇も不要である。従つて動詞 “mthun/ hthun” と結びたる名々 (TGT, p. 488 a-b) なる語形は、その如きである。つまり、この “m (h) thun pa” が、梵語の “sama” と訳る、チベット語の “bu” が “putra” と訳る、即ち “mthun pa” が、また “anu” と訳る、チベット語の “Bu ston” のは、 “A nubi bu” が “sama-putra/ sambhoja” となる、ところが如き、牽強附会の説として評しようがなう。“mthun/ hthun pa” は動詞であり、梵語にこの意味の “sama” という動詞はなう。“sama” はチベット語では “mñam pa” と訳られ、「等しい」を意味する “mthun” の「調和する」「一致する」「相対する」(Y. Dic. p. 241) とは相対しなう。また “anu” は “rjes su” と訳出される prefix である “mthun pa” の意味はなう。更に “sama-putra” と “sambhoja” の間の経庭をうかがひ、 “Anu hi bu” という呼ぶ方は “sama-putra” から «re- “translated”» されたものである、他にも例を、 “mChims A nubi bu Gakya prabha” (KGG, f. 103a, 1. 5) なる、チベット語の呼称である、一般に “rBa Khri bsher gyi bu Khri gzigs” のような二段階の呼ぶ名の前半に見られる一般的な型である。(83) 従つて Bu ston が Thon mi A nubi bu と Thon mi Sambhoja の名を別個に挙げて、 *rGyal rabs gsal bahi me lon* が並び称してゐるのを、さへ、上記のやうな呼称法をもつ史料に拠つたためかと思われる。また、先に述べたやうに Thon mi Sambhoja とは lHa luñ dPal gyi rdo rje などの弟子があつたり、Kha che Ananta と共に活躍したと伝えられるから、その生存年代に考慮を払つて再考すべきであつても、存在自体を抹殺すべき理由は全く見当らない。

Miller 氏は *Sum cu pa* を *rTags kyi hjung pa* を同一時期に書かれたものでなく、特に前者は「一人の著者が一気に書いたものでなからうとする (TGT, p. 490b)。*Sum cu pa* は *rTags kyi hjung pa* に較べると、統一がなく、特に第二四偈以下は無用に見え、第二〇偈以下も補足的な色合いが強くと考えられるので、部分的には Miller 氏の意見に賛同するものであるが、*rTags kyi hjung pa* が「新訳語採用」以後のものである (TGT, p. 491) であるとする意見にも、*Sum cu pa* の一部を特に古く成立 (TGT, p. 500b) とする見方にも同調出来ない。(87)

IV

先ず、*rTags kyi hjung pa* の中の前接字の働きを示した規則についていえば、最も古いと思われる Shol の石柱碑でも、古典時代の動詞と全く同じように、この規則に従った前接字の取り方をしている。(88) Shol の石柱碑は sNa nam rGyal tsha lha snan のあとに宰相をいふ sNa Nan lam sTag sgra klu goñ (DTH, p. 102, l. 16) の頭賞碑で、彼は七八二年以前に失脚している。碑文中には七六三年の吐蕃軍による長安占領に触れている (AHE, p. 18, l. 59 ff.) ので、碑の出来た時期もほぼ推定される。Miller 氏が *rTags kyi hjung pa* が前接字について示した規則をどのように理解したのか不明であるが (TGT, p. 491) これが「新訳語採用」以後のものしか説明しえないと云う事実の指摘がなっているので、その成立を *Mahavyutpatti* 以後とする理由は全くなくなってしまった。

しかも、*rTags kyi hjung pa* は接尾辞の性一致を説く規則があつて “ma nin gis ni ma nin ño” 「中性後接字によつては中性基字〔の接尾辞〕が引き出される」といふのである。この規則によれば、“stön kha” “bisän pho”

“chen pho” “rgyal pho” と云う綴字が存在していいわけであるが、「新訳語採用」以後では一般に、第一例以外には “bsan po” “chen po” “rgyal po” となっている⁽⁴⁾。ただ、「新訳語採用」以前の碑文でも、最も古いと目される Shol の石柱碑の、⁽⁵⁾と云う訳が、南面だけの例 (bsan pho, AHE, p. 16, l. 8, 11; p. 17, l. 16, 21; p. 18, l. 42, 52; chen pho, p. 16, l. 6; p. 17, l. 38, 39; p. 18, l. 56, 60; rgyal pho, p. 19, l. 70) が多く、北面ではただ一例が見える (bsan pho, ibid., p. 26, l. 5) に留まっている。『編年記』にもこの種の例は見られるが、⁽⁶⁾『編年記』一般の傾向として三十表縦第一列の字が第二列の字で書かれるため、⁽⁷⁾適例とすることは出来ない。他の碑文にもこの適用例はない。とにかく *Tlugs kyi hyug pa* で説く規則が、八世紀のある時期以前に行われていたことを反映している点に注目しなければならない。

Miller 氏によれば、*Sum cu pa* は「新訳語採用」以前の内容を含むと云う。この主張自体に反対はしないが、*la don*, “ste”, “kyan” に関する同氏の解釈は、専ら誤訳に基づいていると思われるので、この点を明らかにしながら筆者の *Sum cu pa* に対する位置づけを示したい。

Miller 氏は *la don* に関する⁽⁸⁾いわゆる第八頌を訳出しているが (TGT, p. 483) 引出した Bacot 訳と共に誤訳である。

Gan min mthah na bcu pa gnas de la a li gñis pa sdyar

とあるのは次のように訳される。

何であれ、接尾辞「[の位置]に sa がくる[場合]」その「[sa]」に母音 u をつける。

関係・指示代名詞、“gan……de”の対応を忘れた訳は正しくない。この“gan”は“bcu pa”と同格に置かれたもので、その前の偈の“min gan gi ni mthar sbyar ba/ de la”「如何なる語であれ、その語の末尾に附加した〔同じ〕文字、それに」⁽⁴⁵⁾とある場合と全く異なることに注意しなければならない。“min gan”の“gan”は“min”を修飾し、“min gi mthar sbyar ba”は「語尾に附加した同じ文字」を云い、最後の“de”は“…mthar sbyar ba”を指している。⁽⁴⁶⁾更に云えば、“min mthah”は、先の場合、文法用語「接尾辞」であり、rTags kyi hjug pa の中で明示されている。⁽⁴⁷⁾従って、そこには、Si tu が云うように“min mthah: rjes hjug dan sbyar tshul mi gsal”「語末の後接字との結びつけ方が明かされていない」⁽⁴⁸⁾のである。その点を誤解して、転写上の誤りが多い文書を材料に、Miller 氏のように仮空の連声規則について議論を展開しつつも (TGT, p. 494b) 全く無駄なのである。

Miller 氏は第二三偈をとり上げ“ste”のみ示して、“te”も“de”も示さぬところに注目するが、これは *Sum cu pa* が (作品としてか、或は伝承上からか) 不完全であることを示すのみで、この接続助辞が“ste”だけであった時期がある (TGT, pp. 495-496) とは全然考えられない。Miller 氏が引用する文は、文書であるのか、写本であるのか不明であるが、敦煌文献であるならば、どれだけ早い時期に書かれたにしても、七八七年前⁽⁴⁹⁾ではない。とすれば、Shol の石柱碑文より新しいわけである。今、Shol 碑文を見ると、東面に“sñoms te” (AHE, p. 14, l. 13) であり、南面には“dard te” (ibid., p. 16, l. 9), “gyurd te” (p. 17, l. 19) “brtand te” (l. 23-24) “sod

de" (l. 29) "phul te" (p. 18, l. 48) "stsal te" (l. 58) "byas te" (l. 60, 72) "stsgs te" (l. 64) とあり、北面には "srid de" (ibid, p. 29, l. 67) "mzad de" (l. 68) など、⁽⁵⁰⁾ "ste" の他に "te" や "de" もあり、Miller 氏の示す文例が誤記、誤写を含むものであることを立証している。

Sum cu pa が *la don* 辞のよう⁽⁵¹⁾に "tu" を示すなら (TGT, p. 496b) など⁽⁵²⁾ Miller 氏はなされてゐる。しかし、"tu" の使用そのものが新しいのである。Shol の石柱碑文では、Richardson 氏の誤りでなければ一回だけ "tu" が示される (AHE, p. 18, l. 48)。しかし、他の場合は、後代 "tu" となるところもすべて "du" となっている。skar cun 碑文に一例、Shvahi lha khan の碑文には "tu" が二例もあるが、他は "du" のまゝである。唐蕃会盟碑は「新訳語採用」以後のものであるが、この中では Richardson 氏のテキストにのみ東面に一回 (AHE, p. 56, l. 28) 西面に三回 (ibid, p. 68, l. 43, 57; p. 69, l. 76) 見えている。しかし、佐藤氏のテキストでは全部 "du" となっており、Richardson 氏のそれは誤読の疑が濃厚である。⁽⁵³⁾ とすれば、問題の *Sum cu pa* に "tu" が入っていないのがむしろ当然であり、後接字 "ga" "ba" と再接接字 "da" のあとに用いる *la don* 辞を特に "tu" としたのが「新訳語採用」よりも後のことだからである。

Sum cu pa が *la don* に関して連声規則を示していないこと及び、"tu" を記録していないのが当然であることを見たが、"te" や "de" のように既に用いられていたものも示していないので、現存のテキストが、もし完全な形で伝えられたものとしたら、この文典が極めて不備なものであったと認める以外はないのである。⁽⁵⁴⁾

右に、「既に用いられているものも示していない」と述べたのは、次に見るような事実に基づいている。即ち、“te”や“de”を用いた Shol の石柱碑が *Sum cu pa* より一足先に出来ていたという事実である。この点を次に実証して見たい。先づ *Sum cu pa* の成立が「新訳語採用」時より前であることは、著者の立場では、*sGra shyor ban po gñis pa* の *ra* と *rTags kyi hjug pa* と合せて *byā ka ra na* として言及されているから、端的に明かなことであり、Miller 氏の所説と同じである⁽³²⁾。今、*Sum cu pa* が Shol の石碑より新しいとなれば、その成立の時期が自ら定まるのである。

Sum cu pa は属格助辞についてのみ連声規則を明示している⁽³³⁾。これは、第九、第一〇偈と云われるもので、今日でそのまゝの規則が用いられている。そのまゝ

sum lña bcu la kya dan sbyar/...de dag i sbyar hñrel pañi sa/

〔後接字の〕三番 [da] 五番 [ba] 十番 [sa] とは kya を後につけ、……それらに i [母音] をつければ、属格の場合である。

とあり、明らかに属格助辞“kyi”のつけ方が示されている。

この *pa* が Shol の石柱碑では、東面 (AHE, p. 14) に “stsald gyis” (l. 5, n. 2) “gñis gyi,” (l. 9) と合せて 西面 (ibid., pp. 16-19) に “srid gyi” (l. 25), “stsald gyis” (l. 28), “gros gyis” (l. 29), “gros gyi” (l. 43, 55), “bod gyis” (l. 54, 60) と合せて 南面 (ibid., pp. 26-29) に “blas gyi” (l. 18), “rgyud gyis” (l. 21), “gyod gyi” (l. 24), “ñphrel gyis” (l. 51, 61) “peld gyis” (l. 59) と合せて 属格助辞“kyi”が全く用いられて

ない⁽²⁸⁾。しかも、他の属格助辞は“gi”も“gyi”も“hi”も規則通りに用いられており、王の敕許碑文としての格調を保って、手ぬかりがない。

Shol の石柱碑以後は、唐蕃会盟碑は勿論のことであるが、bSam yas の鐘銘 (TTK, p. 108) も含め、すべて“kyi/kyis”が用いられていることも充分確認されている⁽²⁹⁾。

以上のことから *Sum cu pa* の第十偈は Shol の石柱碑より以前に書かれたとは云えなくなり、bSam yas の鐘銘が刻まれた頃より後の作とする結論が生れる。*Sum cu pa* は *rTags kyi hjug pa* に較べて内容的に不整合なものを含むが、既に見たように、後者が「新訳語採用」の後に成立したとは云いかねるし、二つの著作が *bya ka ra na* の名のもので一括して呼ばれているものとすれば、二つの作品が、二つの可成り離れた、別個の時期に成立したとは云い難い。

むすび

Khri sron lde brtsan 王の七七九年に印度から一二名の僧がチベットに招かれ、梵語の学習がはじまり、訳経事業の第一歩が踏み出された。この時、チベット語にとって先ず第一に要請されたのが正書法であったことは云うまでもない。*Bya ka ra na* がこの要請に応じて書かれたものであるとすれば、その成立の意義は最も理解し易い。*rTags kyi hjug pa* には「語」の構成が語られ、その理論が示されているのに対し、*Sum cu pa* には「語」の構成が略説された後、「辞」の働きが示されているからである。ただ、「辞」のすべてが語られぬまゝに、“de”や

“gan”が語られ、更に、第二四偈以下の教誨が続く点は奇妙であり、Miller氏の云うように、一人の人によって一気に書かれたものではないかも知れない。⁽⁸⁹⁾

著者の見るところでは、“*rTags kyi hjuṅ pa*”は、それ自体で完成された作品であり、これを、不完全な *Sum cu pa* の説明の爲の著作とは考えない。⁽⁹⁰⁾ *Sum cu pa* は、*rTags kyi hjuṅ pa* の概説した一部を詳説しようとしたものであろう。それが、不完全であったため、更に手が加えられたのかも知れない。この点は、*rTags kyi hjuṅ pa* の所説に適合する例が、Sholの碑文の一部に見られ、Sholの碑文がまだ知らない連声規則を *Sum cu pa* が記載していることから裏づけられるように思われる。

ともあれ、現存の *Sum rtags* を Thon mi A nuhi bu (または A nu) もしくは Saṃbhota の作とする限り、その著者を Sroṇ brtson sgam po 時代に活躍した人物とすることは出来ない。この人物にチベット文字の正書法についての功績を帰することは出来ようが、文字そのものの創制の功を帰することは出来ない。

Thon mi saṃbhota の伝記は、永年の間に Sroṇ brtson sgam po 時代の人物として出来上ってしまったおり、そこから真相を取り出して示すことは不可能である。ただ、以上のような方法により Sroṇ brtson sgam po 時代の人物ではありえないことを言うことで満足しなければならない。ただ、*Sum rtags* の著者ではないが Thon mi 某と云う人物があつて文字を伝えたということでもあれば、話は別である。

チベット文字については、A.H. Francke や B. Laufer 以来の議論があるが、Thon mi による伝来についての記述を離れるならば、稲葉氏が云うように、E.H. Jonston の発表した Gopālpur 発見の文字のようなもの由来

し、著者の考びだ、Khri sron brtsan 代に正式に用いられるに至ったと云ふべくも思われる。⁽¹⁹⁾

(東京大学文学部助教授 東洋文庫研究員)

参考文献

- AHE H. E. Richardson : *Ancient historical edicts at Lhasa*, London 1952.
- BKT *blon po bkahi than yig*, gter kha by O rgyan glin pa, Ed. Shol, 77 fols.
- BSS *b Tsan po Khri sron lde btsan dari mkhan po stob dpon Padmañi dus mdo sñags so sor mdzad pañi sBa bshed shabs btags ma*, Ed. by R. A. Stein, 92 pp., Paris 1961.
- CL P. Demieville : *Le Concile de Lhasa*, Paris 1952.
- DTH J. Bacot, F. W. Thomas, Ch. Toussaint : *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*, Paris 1940.
- GEN *sGra sdyor bam po gñis pa*, Ed. 半真 bsTan hgyur, No. 5833, Vol. 14.
- GSM Sa skya pa bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan : *rgyal rabs nams kyi hbyuñ tsñul gsal bañi me loñ chos hbyuñ*, Ed. sDe dge, 104 fols.
- HLD Tshal pa Kun dgah rdo rje : *Hu lan deb ther*, Ed. Gantok, 1951.
- KCI H. E. Richardson : *The skar-cung inscription, JRAS*, London 1973. pp. 12-20.
- KGG dPañ gtsug lag hphren ba : *Chos byuñ mkhas pañi dgah ston gyi* Yan lag gsum pa las Bod kyi rgyal rabs, Ed. lHo brag gñas, 155 fols.
- LKT *Lo pañ bkahi than yig*, gter kha by O rgyan glin pa, Ed. Shol. 81 fols.
- MBT G. Tucci : *Minor Buddhist Texts II*, Roma 1958.
- NIR H. E. Richardson : *A ninth century inscription from Rkon po*, *JRAS*, London 1954, pp. 157-173.
- PT Fonds Pelliot tibétain.
- SRD Bu ston Rin chen grub : *bDe bar gcegs pañi gsal byed chos kyi hbyuñ gnas gsuñ rab rin po cheñi mdzod*, Ed. sDe dge, 203 fols.
- SST Si tu Chos kyi hbyuñ gnas : *Si tu hi Sum rtags, An introduction to the grammar of the Tibetan language with the texts of Si tuñi*

sun-rtags etc. by Sarat Chandra Das, Darjeeling 1915.

TGT

R.A. Miller: Thon mi Samhota and his grammatical treatises, JAOS, 1963, pp. 485-502.

TIS

H.E. Richardson: Tibetan inscription at Shvahi lha khan, JRAS, 1952, 1953, pp. 133-154, pp. 1-12.

TLT, II

F. W. Thomas: Tibetan literary texts and documents concerning Chinese Turkestan, part II; documents, London 1951.

TPG

Padma dkar po: Chos hbyun bstan pa'i padma rgyas pa'i rin byed, Ed. sPun than, 189 fols.

TTK

G. Tucci: The tombs of the tibetan kings, Roma 1950

Y. Dic.

H. A. Jäschke: A Tibetan-English dictionary, London 1949.

『古チ研』

佐藤長『古代チベット史研究』京都 昭和三十三年
二四年

『菩提記』

DTH, pp. 100-102.

『年代記』

DTH, pp. 97-100, 102-122.

『編年紀』

DTH, pp. 13-27, 55-61

『三十頌』『性入法』の成立時期をめぐって 山口

『チ古文』稲葉正就『チベット語古典文学法』京都 昭和二十九年。改訂版、京都 昭和四十一年。

『東北目』東北大学『西藏大蔵経目錄』仙台 一九三四年

註

(1) 例えば、『年代記』の中には歌の形式が多く取り入れられているが、地の文に相当するところも一定のリズムが保たれており、口伝のものであったことが推測される。これらに対して、『編年紀』や、文成公主に関する文献には、この種の配慮は全く見られない。

(2) Sron btsan sgam po が Lhasa に住んだというのは後代の所伝に多く述べられる。『年代記』によれば、Khri sron btsan の晩年と近く頃、Khyun po sPun sad zu tse (太子殺)・息子 of Nag re khyun が父の前をめぐって、*“sku mkhar Pyin ba”* 即ち Yar lun の Phyin ba の城に参りつづるから(DTH, p. 112, l. 8-10) 常駐の居城は Yar lun に、“dbyar sa” 夏の住地”は Lhasa 方面が選ばれたのである。と云うのは、この王の治世中に建ったところ所伝の *“Ra mo che, hPhrul snan”* (小招・大招寺) といふ今日の Lhasa と *“Lha sa of Ra sa”* (cf. CL, p. 154, n. 5) が確認されつつあるからである。*“Ma ru”* は *“Mar bu”* の崩れたもので、今日の *“dMar*

pho ri”と関係があるのかも知れない。

- (3) 八論というのは、文字通りでは *Sum rtags* の二論の他に六論を作ったことになるが、稲葉正就氏の『チベット語古典文法』旧版(昭和二十九年)では「二部ひやく編のつづから二作のみを、例をば、Pāṇini の文法書が八章から成り *Aṣṭadhyāyī* と呼ばれてつづるものなるのひびきならぬ(同書 p. 3) と同じである。R. A. Miller 氏は稲葉氏の意見をうけあつた後、Ice Khyi ḥbrug の *Gnas brygyad chen poḥi rtsa ba* と書及つて、著者の名を *sGru sbyor bam po gñis pa* と載つてゐる(GBN, f. 2a, l. 6-f. 2b, l. 1) といふのは、(TGT, p. 487a) の Bu ston の書及が、この本の結のひびきのひびきならぬといふのである。Ice Khyi ḥbrug と同じでは *dPaḥo gtsug lag ḥphreṅba* の書及である(KGG, f. 125a, l. 2) の、上記以外の語法である。
- (4) Bu ston 25 *IHa luṅ dO rje dpaḥ* とつて後の *IHa luṅ dPal gyi rdo rje* の区別なしと誤つてゐる(SRD, f. 119b, l. 1)。
- (5) 有名な *Lo ham rta ḥdai* (DTH, p. 97, l. 16—p. 98, l. 17) の、古蕃の軍制について提供した mChims Mañ bsher ḥan pa の “*tug rda*” をつづたところの所引(KGG, f. 19a, l. 4) “更だ” 古蕃の国家制度をいふ “rgod-sde” 「神国」 “gyuṅ sde” 「民国」などあるのは「民国」の

ひびきでは “*lo ham rta rdzi sogs rdzi bdun*” 「*lo ham rta rdai* なむ」(ひびき)や種々の *rdai* (KGG, f. 20b, l. 2) など定められたところの場合の “*rdai*” とひびき、今日の “*rdai bo*” 《herdsman》(Y. Dic. p. 468b) のより起源的な意味を考へればよい。Yäschke の “*mi rdai*” 《guarder of man》といふ用例を示してゐる (ibid.) のが参考になるひびきである。

(6) 敦煌文獻『年代記』(DTH, p. 118, l. 16-24) の、*Khri sron brsan* を讀まなかつた言の公教と載はるゝひびきである。この公教のひびきは、

(7) 説經に關しては、*sBa bshed* の中で *Khri sron lde btsan* 王の *San gi* なる公教の經典のひびきは、このひびきを説明される、*「このひびきは、法がわが御代に得られたひびきは、ひびき」*といふ、説經事業を志したと述べるひびきである(BSS, p. 10, l. 4-1, 14; KGG, f. 78a, l. 5-f. 78b, l. 4) のひびきである。以前に公教なまづ知のあるひびきひびきは、ひびきであるひびきである。

(8) SRD, f. 124b, l. 6-f. 125a, l. 2; HLD, p. 18b, l. 7; GSM, f. 98b, l. 1-5)。

(9) KGG, f. 106a, l. 3-f. 108a, l. 3 の語は *IHa luṅ* 三兄弟の略語なひびきである。典拠は *bla ma Zanṣ ri ba* の *Yer pa* を修復した時発見したところの *Yer paḥi dkar chag* のひびきである。

- (9) *Sum cu pa* の *rTages kyi hting pa* の *non* とは、著者名の *slob dpon A nu* である。
 (11) 吐蕃末期の破仏に際して仏教書などが隠匿され、十世紀以後の仏教復興の折に方々の古刹から発見された。これらを *ster kha* とするが、それが中国仏教、特に禪関係のものである場合、印度仏教全盛の風潮に合せ、手を加えて編集したところ。例えは *blon po bkash* *than* の一部は PT, 116 に酷似するが、全く同じではない。
 (12) DTH, p. 109, l. 7, *hbrin tho re*, その異字として *hbrin tog rie* (ibid., p. 100, l. 13) もある。
 (13) DTH, p. 100, l. 10; p. 101, l. 15-16.
 (14) *rGya Ananta* とするのと同じ人物かと想われ、*rGya mes ngo* と共ににほむの訳業の試みに着手したとされる (BSS, p. 10, l. 14; KGG, f. 78b, l. 3) が、説話として出来た色合が濃厚である。
 (15) R.A. Miller 氏は *Thon mi* の “*bstan bees bryad*” と *Ice Khvi hbrug* の *gus bryad chen phvi rsta ba* の間を疑っている様子である (TGT, pp. 486b-487a)。
 (16) 『東北目』no. 4348, no. 4349. これが雑部に編入されているのは、チベット人の著作だからである (TGT, p. 490b)。
 (17) 一般に *Khri sron lde brsan* の業績が *bisan po*

Sroñ lde brtsan (Sroñ btsan sgam po) の業績に帰せられたのだ。一〇世紀以後の仏教再興運動の過程にならうか。たゞのち考へるが、Africa の gter kha といふのは Sroñ btsan sgam po 以下 *Ka bkol ma* といふのから現れよう (KGG, f. 15a, l. 1. 以下に引用文参照)。特に Thon mi といふ Thon mi sam bho dra mi chuñ といふ mGar sToñ btsan yul srub といふくと言及する (ibid., f. 26a, l. 4) といふ。Thon mi の田慶留といふく *Ka bkol ma* といふの引用文と読まれるのは次のやうである。"thon gyi lug ra kha nas thon mi a nu rag tahi bu thon mi sam bho dra bya ba mi chuñ blo gsal ba shig la gser phyre bre gañ bskur te brāñ skad" [Thon の Lug ra kha といふ Thon mi A nu rag ta の十 Thon mi Sam bho dra といふたのち子供の頭顯明漸なるのの砂金 1 bre といふて送るはうへ] (KGG, f. 15a, l. 7-f. 15b, l. 1) といふ前後の文は dPañ gtsug lag hphren ba の手になぬのといふ。正確には出典が明かでない。但だ、Sroñ btsan sgam po の時代といふ語られようといふ疑う必要がない。 *Ma ni bkah hbum* といふ Thon mi A nu hi bu Sam bho ta の田越留を来くといふ (MKB, f. 89a, l. 6-f. 89b. l. 4)

(18) 『チ古文』p. 3. 稲葉正就「トンミに帰せられた著作に」

「い」』『大谷学報』46-4, p. 25. 以下の中は、チン文字の構成に「い」は *ma dam pa* が述べている「い」を *Thon mi mdo rdzini sgra mdo* の内容である。稲葉氏はこれを「い」が *gSal bavi me lon* に「*hdi ni zur tsam yin gyis*」に「い」は概略である（GSN, f. 31a, l. 4）と見て、抜粋では「い」（cf. Y. Dic. p. 489a）。「い」は「cha tsam」「cha hdra tsam」と「cha gas」とはすべからず。

- (19) Si tu だ、*Sum rtags* の注釈の「い」は *Sum cu pa* というのは、「三〇字」の注釈と同じ意味か、「三〇」の偶から成るという意味かと自問した後、あとの方の意味であると答える。何故かといえは、「三十」の注釈なら「*rTags kyi hjug pa*」で *Sum cu pa* と名づけねばならぬからと「い」は（SST, p. 2, l. 8-14）。然し「*rTags kyi hjug pa*」は「三〇」の偶から「い」に気がなかったらしい。稲葉氏は「*rTags kyi hjug pa*」の内容を「三」偶として「い」（『チ古文』p. 10）が、最終偶は一句余りとなって、直前の一句と共にしめへりを果しているであり、「三〇」偶である。

- (20) *Sum cu pa* の方が根本は「*rTags kyi hjug pa*」を支持論であるとする稲葉氏の主張（『チ古文』p. 4）は、伝統的な見解とも一致するものであるが、内容的には

詞と結らつく辞などの機能を説いた *Sum cu pa* よりも、語そのものの構造を説明した *rTags kyi hjug pa* の方がより根本的であると思われる。また「*rTags kyi hjug pa*」は *Sum cu pa* の説明に当る内容、辞の連声規則の解説（『チ古文』p. 10）は含まれていないから、支持論とする見解は成り立たない。

- (21) Si tu だ、*Sum cu pa* の表題は「三〇字論」の意味を託する人がいることをほのめかし、その意味なら「*rTags kyi hjug pa*」で「三〇字」論といわねばならなくなる（注 19 参照）としているが、「三〇字論」と名づけるなら「*Sum cu pa*」で「*rTags kyi hjug pa*」の方が、文字の綴り方をいう内容から考えて、遙かに適合しているといわねばならぬ。

- (22) SRD, f. 199a, l. 2-3.

- (23) *rTags kyi hjug pa* の規定によれば、前接字「ga, da」は「三〇」字表縦第二列の字にくることが出来ないの「gching」などという字はあり得ない。しかし、『編年記』には「いたるところこの種の違反がある。

- (24) TTK, pp. 18-19.

- (25) op. cit. p. 15, Tucci 氏は《colophon of MYP》というのを *sGra sbyor bun po ghis pa* のことと思われる。しかし、適訳ではない。

(26) bsTan hgyur の雑部にはチベット人による重要な著作と、後代の訳業とが収められてゐるが、*Sum rtags* は *Mañjuśrīpāṇi*, *sGra sbyor bam po gñis pa* に続いて示され、そのあとには Ice Khvi hbrug の著作と注釈がへる。これらのうちが “*bya ka ra na*” の名は *Sum rtags* にしか冠されてゐない。また *sGra sbyor bam po gñis pa* の説明では、この *bya ka ra na* の方式に則つて訳文を改めるとあるから、*bya ka ra na* はチベット語の文典であり、今日の資料では *Sum rtags* 以外を考えることは出来なう。

(27) 注20参照。

(28) 稲葉正就「トレンツに帰せられた著作について」(注18参照)では、R. A. Miller 氏の意見をうけつて *Sron btsan sgam po* と同時代の *Thon mi* とつらつ懷疑的ないつころ。その理由として *Shol* の石柱碑銘が *Sum cu pa* や *rTags kyi hjung pa* の規則を守つてゐないからといつてゐる。しかし、詳細な検討は全くなう。そこでは、やはり Miller 氏の意見と同調して *rTags kyi hjung pa* の方の著作年次がおくれるかもしれないとする意見も見えてゐる (op. cit., pp. 34-35)。

(29) *Shol* の石柱碑文が *Thon mi* の規則を守つてゐないといふ (注28参照)も、このような解釈も、無理にすれば出来

『三十頌』『性入法』の成立時期をめぐって 山口

る。しかし、*Shol* の碑文は敕命碑文であるから、この説明は通用しない。その上この石柱碑文は、*Thon mi* の規則とされるものの一部を厳守してゐるのである。本文 pp. 15—16参照。

(30) Miller 氏の意見は、稲葉氏の影響がよくうかがわれるが、稲葉氏は、逆に Miller 氏の影響を受けてゐる (注28参照)。

(31) F. W. Thomas の意見に対する Miller 氏の批判 (TGT, p. 487b) とは全く賛成である。

(32) TGT, p. 488. 例をば *bsTan hgyur* の *dkar chag* は、これを選んで一八世紀以後のものといふ。また *rGyal rabston pa* は一五世紀末のものである。また *rGyal rabsgal bhai me lon* は *mTho mi nyin* したといふ一かな所である。従つて Tucci 氏の引用文の誤りである (Tibetan Painted Scrolls, 2. 421) によつて Miller 氏が指示したものは不明)。

(33) *mKhas pañi dgañ ston* とは他に例が示される。(KGG, f. 103a, l. 5; f. 103b, l. 4)

(34) Miller 氏は、*Bu ston* と *Thon mi a nuñ bu* と *Thon mi sañ bho ta* を別個に挙げて強調する (TGT, p. 490a) が、*Bu ston* の仏教史の一部しか見えないからであるといふ。チベット人の著作を論じたところでは (SRD,

f. 199a, l. 2) Thon mi Sam blo ta 〇 *Sum rtags* を
 挙ぐる° *Sum rtags* 〇 $\pi\pi\pi\pi\pi\pi$ slob dpon A nu
 〇 $\pi\pi\pi\pi\pi\pi$ したがって Bu ston は slob
 dpon A nu 〇 Thon mi Sambhota とを同一視してゐた
 ことがわかる。また° $\pi\pi\pi\pi$ bsTan hgyur 所収の *Sum rtags*
 は A nu 〇 $\pi\pi\pi\pi\pi\pi$ SRD では A nu hi bu 〇と
 点が異つてゐる。

(35) TGT, p. 491b-493a. 注66参照。

(36) TGT, p. 494b. 本文中に示すように la don に関して
 は連声規則が示されてゐない。これを誤記して Miller
 氏は、今日知られていない連声規則があったと思つてゐる
 のである。もし Miller 氏の理解するような連声規則が
 あつたと仮定すれば、それは七世紀後半以後に行われてい
 たものとしなければならぬ。とすれば、Shol の石柱碑な
 どは、その連声規則の特異なものを全部忘れて、跡も残し
 ていないことになる。更に、後接字が “s-m-p” 以外の場
 合、連声する la don 辞がないわけである。その結果、動
 詞を修飾する用法の de hid は、連声辞によつてしか出来
 ないので、特定の詞にしか適用出来なくなる。

(37) Miller 氏は “gshan bsgrub phyir” として、Bacot
 及び稲葉氏を批判して Chos skyon bzau po の説を援
 用する(TGT, p. 491b) したが、Sha lu lo tsa ba Chos

skyon bzau po (1441-1528) は Si tu Chos kyi hbyun
 gras (1699-1774) より権威があるわけではない。更に
 “dhos po gshan” と “bya ba” を分離しては意味をなさな
 いことがわづかしく、それでは原文典家の説明が理解でき
 ない。Si tu 〇 $\pi\pi\pi\pi\pi\pi\pi\pi$ 〇 $\pi\pi\pi\pi$ “byed pa po gshan
 dan dhos su hprel bahu bya ba byas zin hdas pa bsgrub
 pahi phyir” 「行為主体と他〔対象語に示されるもの〕との
 實際に関連する所作が為され終つたこと〔即ち〕過去が
 成り立たれる為」に ba 前接字がつけられ、他の一つは
 “byed pa po gshan dan dhos su hprel bahu bya ba
 yul dan bya ba bsgrub pahi phyir” 「行為主体が他〔対
 象語に示されるもの〕と實際に関連する場合の所作境〔即
 ち、他〕と所作〔との結びつき〕が成り立たれるため」
 (SST, p. 46, l. 24-25) である。後者についていうならば、
 「子供が石を投げる」という場合、行為主体は「子供」、他
 は「石」、所作は「投げられる」である。今、「子供」が
 「石」と實際に関連する場合、所作境の「石」と所作の「投
 げられる」の結びつきが成り立たされる。というのは、行
 為の《object》な側面を指して、その成立をいうのである。
 別の言葉でいえば「受動態」である。チャットの文典
 家は「この行為を “bag dan hprel bahu byed pa”
 (SST, p. 55, l. 14) 「行為主体と関連する能作」即ち

《subject》な面と、上述の《object》な面とに分けていう。従って、行為は必ず *bdag* か *gsheh* かの一方の側面から行われ、《*Dhos po gshan und Bya ba bsgub-pa*》などという分け方は文法的に存在しないのである。

(38) *ba* 前接字は、「他動詞の」過去形か未過去形（*gzu*）れも《object》にしかつかない。 *ga, da* 前接字は、「もた（他動詞の）現在形につく」。

(39) 佐藤長氏が *stNa nam rGyal tshan lha nan* の大論就任を『旧唐書』吐蕃伝の建中三年九月の条によつて、建中二年から三年の間としてゐる（『古チ研』p. 626）に従つた。なお、旧伝のこの記事に尚結恩 *shah rGyal zigs cu sten* と結贊 *rGyal tshan lha snan* の交替を伝へる文句から、『宰相記』が、両者の間に *Nan lam sTag rgra klu gon* を挟む（DTIH, p. 102, l. 16）のを訂正しつゝ、*rGyal tshan lha snan* の歿した七十六年（『唐書』吐蕃伝下）による『古チ研』p. 666）以後に宰相になったものとしてゐる（*ibid.*, p. 692）。しかし、中国史料の記述によつて『宰相記』の就任順位は安易に変えられない。例えは *Nan lam sTag sgra klu gon* の在位が短かつた場合は、恰かも上記の二名が直接交替したように伝えられる可能性もあるからである。 *bsam yas* の *dbu rse* が出来て

『三十頌』『性入法』の成立時期をめぐって 山口

以後、仏教を奉ずると誓つた七七九年孟春に於ける *Khri sron lde btsan* 王の誓約文には、副署名者の筆頭が *shan rGyal gzaigs cu ther (lhen)*、次が *bion sTag sgra klu gon*、第三位が *shan rGyal tshan lha snan* である。この順位は簡単に崩れるものではない。また *Sba bshed* (BSS, p. 8-11; KGG, f. 91a, l. 1-2) に於ける *sTag ra (sgra) klu gon* は王命に背つて *Bon* 教を奉じたことを北方に追放となり、失脚したとされる。これは *Khri sron lde btsan* 代のことであるから、若し *rGyal tshan lha snan* の登場が七八二年なら、*bsam yas* の誓うのやうな七七九年以後この年の間に *Nan lam sTag sgra klu gon* の宰相就任と失脚があつたことになる。*Nan lam sTag sgra klu gon* が中国史料によつて馬重英であることが観察によつては、李方桂氏の論文（『馬重英考』、『國立台灣大學文史哲學報』第七期、一九五六、pp. 1-8）と佐藤長氏の所説（『古チ研』pp. 554-555）に譲る。

(40) 『古チ研』pp. 534-537。なお、『編年記』の長安占領記事には年次を示すものは欠けており、虎の年としたのは *Thomas* の補筆である（DTIH, p. 60, 『古チ研』p. 537）。

(41) *rTags kyi khyng pa* のこの規定は、古典時代のチベット語では殆んど有名無実である。この点について、*Si tu hi Sum rtags* では、用例が挙げられないのに困惑し

じ、*Sum rtags* 中の次にくる偈文を依用して“*brjod bde bas sgra mthun pa*”「発音し易いところにては連声む」（中性でありながら）女性「接尾辞」を引く」として（SST, p. 70, l. 4）。然し、△各種の辞との間に連声があるところのものが、次にくる偈文“*min mthah dag hid k'is*”以下の趣旨であり、変則な接尾辞の取り方を示すものである。この点について、*Si tu* が引用する“*qdir kha cig/ khyod k'is rtags mshuns b'dren pa'i dper bkod pa hdi rnam la khyod k'is khas blans pa dan hgal ba yod de*”「この点について或る人は、汝が、相応する性を引くという範例をきめておきながら、それらに対して汝自身が違反することになるのだ」という非難は、古典語に関する限り本当である（ibid., l. 11）。従って、この規則の適応例が或る時期には多少多くあったはずだと考えられるのである。

- (43) *sGra sbyor bam po gñis pa* 「*Byā ka ra ŋa*」と示された方式と一致しない」としてゐるのは、このような例をいうのであらう。

- (43) 偈の番号は専ら稲葉氏（『チ古文』旧版 p. 314 以下）の所説に従った。

- (44) “*min mthah*”「語の直後ではるもの」の意味で「接尾辞」をいう。*Si tu* は *min mthah'i rjes hjug* 「語末

の後接字」と“*min mthah*”「接尾辞」のまわらわしに困難がつく（SST, p. 69, l. 12-13）。“*min mthah na*”とある場合には“*min gi mthah na*”の略形として「ある語の後」に訳しうるかも知れない。しかし、*Sum cu pa* には、*Si tu* が困惑するもの当然で、“*ni*”の辞の説明で、“*gan min mthah na* [またな dan] mthun pa yi/ bslu pa la”という句がある。これは「どのような語末とも調和する *na* の字」と訳しうる。とすれば“*min mthah*”は後接字であり、接尾辞ではなくなる。こので *Sum cu pa* の用語の統一が崩れてしまう。上の読み方の弱点は、和訳のようになるには *min mthah gan na* … “とあるが、“*min gan gi mthar*……”となるべくしようとせう。*Sum cu pa* における用語の統一という点からいへば、これは“*gan dan min mthar mthun pa yi/ bslu pa*”何とでも、その語の後において調和する *na* 字」とあったものか、または、そのように解すべきもののように思われる。

- (45) この文のみから「同じ」文字であることがわかるわけではない。実際の用例から「同じ」文字であるとするのに過ぎない。

- (46) “*min gan*”の“*gan*”が、疑問形容詞に由来する不定形容詞として用いられており、“*de*”はこの“*gan*”を指す

(47) *rTags kyi hjug pa* の帰敬偈を除いて、四句一偈と数える場合の第二一偈にある。

(49) 七八七年を敦煌陷落の年とすることは De-

miéville 氏の説があり (CL, p. 177)。他方に、藤枝晃氏による七八一年陷落説がある (同氏「沙州帰義軍節度使始末」(『東方学報』22-9, p. 94, n. 50)。しかし、チベット史との会通を得るには、前者の意見に従わねばならない。

山口瑞鳳 (批評) 曇曠と敦煌の仏教学、『東洋学報』47

(50) Richardson (KCI, p. 13, l. 2) 氏~~ノ~~ Tucci 氏

(TTK, p. 104, 1.2) 及び “*yun tu*” と表わす。
TIS, p. 153, l. 41 “*yun tu*”; l. 42 “*phyag tu*” 及び
“*sKar cun* 轉文” Shrahi lha khan のこと。 “*yun tu*” は “*yun du*” と誤るべきものであろう。従って、
有効な “*tu*” の用例は一例のみとなる。

(51) Richardson 氏の碑文に対する字形の判読態度について、次の例を挙げて置く。これは Shō 碑文東面五行の場合であるが、テキストは “sstad kyis kyan” となつてゐて注①《Bell reads “gyis” but it is clearly “kyis”, which is the correct form a *fter afaul* “d”》と論じてゐる。

リックで示したのは、Richardson 氏の判読を支えた予見である。本文で見えるように、Shol の碑文では、後代「kyia」が用いられるところにも「gys」が用いられている。従って、著者はここでは Bell の読み方采用了。

て、著者はここでは Bell の読み方を採った。

(52) 稲葉氏は「トシミはこれら再添後字に關して何ら触れていない。したがって再添後字の後にくる助辭についても全く言及していない」(『チ古文』p.75)としている。*Sum rtags* には再添後字(再後接字)そのものをいう句はない。しかし、「再添後字を予想しなければ」*rTags kyé hñg pa* の第一五偈後半「sgra yi hñg tshul don gyi tshul/ pho gsun mo gñis ma nih gsun」から第一九偈までありえない。従って「*Sum cu pa* 中に再添後字(*da drag po*)のあとにくる助辭“e”に触れていないのは、“de”(指示代名詞との混同は更に愚劣な見解である)に触れないのを含めて、大きな欠陥とされねばならない。

第五十七卷
三一

年には *dbu rtse* (本堂) が完成し、*Sad mi* 「試みの人」の出家式が行われた。鐘は、この頃までに出来ていたものであろう。この鐘銘に「母子」とは別に「御父子御夫妻」というが、それは *Khri sron lde brtsan* と他の妃達、及びその子供を指すものと思われ、当時 *Tshes poñ za* の子 *Mu ne btsan po* (762/775 年生、*KGG*, f. 126a, l. 3) が出生したところからである。この場合、*Jo mo* の子が最も年長であったから、この鐘の寄進を許されたに違いない。Tucci 氏は、『王理決』(CL, p. 25) に「皇后没盧氏」とあるのは正確ではなく、チベット史料では *Tshes poñ za* を皇后とす (MBT, p. 37) という。 *Khri sron lde btsan* 王を継いだ *Mu ne brtsan* の母で、確かに *Tshes poñ za rMa rgyal ldon skar* (DTI, p. 82, l. 32-33) の母で、*Mu ne brtsan* と記さるが、それが *hBro bzah* の子である、即位せしに致しつたれば (NIR, p. 169) *hBro bzah* は *Jo mo geen* と呼ばれ (KGG, f. 104b, l. 2; BSS, p. 51, l. 10-11)、尊敬されるもの当然である。“*geen*” は “*chen*” に由来し、単に年令ばかりでなく、あまたの妃の中で最上位であったことを示している。彼女が *Mu ne btsan po* を *Khri lde sron btsan* の母ではなかったのこの称号をめぐり *Khri lde sron btsan* 代に *Khra hbrug* に再び鐘を寄進した (NIR,

p. 169-170) のであれば、彼女にはなお別格の権威が認められていたということであろう。

- (58) 辞について語られる場合も、連声を具体的に述べたのは属格助辞にいつてのみであり、“*cin, shin, gin*” などについて、連声どころか言及さえしていない。しかし、これは *Shol* の碑文でも用いられている (AHE, p. 14, l. 13; p. 17, l. 26, 40; p. 18, l. 47, 68; p. 19, l. 73; p. 27, l. 13, 20, 26) Miller 氏の指摘する (TGT, p. 493a) ように *Sam cu pa* 本文中でも、いわゆる三偈までとは現れないが、その部分で用いられている (次注参照)。
- (59) Miller 氏は、*la don* を示す第八偈と “*ste*” しか示さないうち第三偈をとり出し (op. cit. p. 492a) 、“それが特に古くものであると考え” *min mthab* の語を「後接字」の意味に誤解して、今日知られない用法があったものとする (ibid., p. 494b)。第三偈が “*ste*” しか示さないのは “*ste*” しか用いられなかった時代があったとして、*Bya ka ra na* に従わなうことで有名な北方占領地の文献を用例として示す (ibid., p. 496a)。この見解をうち出すために、第八偈と第三偈とは元来続いていたものと見るが、そのような場合に、第三偈の冒頭に “*la don su la...*” などという不恰好な示し方はいらないであろう。直前に示したものを、重ねて “*la don su la*” とするはずがなく、隔てると

ころがあったから、改めて、その称を用いる修辭法が可能だったのである。また、*la don* のあとに *hbrei sgra* と *bred pa pohi sgra* がくるのは、動詞を挟む文法的機能からいえば当然の須序であって、これを崩す方が奇異であろう。この点では、Miller氏の所説に反対であるが、第二四偈以下は、《late non-grammatical accretion》(TGT, p. 492b) とするのと同調する。

- (9) これは伝統的な考え方であり、稲葉氏も肯定している(『チ古文』p. 4) といふ点あり、Miller氏も *Sum cu pa* をより古くとするのは、この点について肯定するものとしてよいであろう。著者の見解では、*Sum cu pa* の現存の内容から、この論の表題に“*mūla*”即ち“*rtsa ba*”「根本」と名づけられているのが奇妙であり、これをつけるなら *rTags kyi hjug pa* に冠すべきなと思われる。更に一步すすめていけば、*rTags kyi hjug pa* は三〇の偈から成るべき、*“mūla triñ gad”* “*rtsa ba sum cu pa*”『根本三十頌』の語は、*rTags kyi hjug pa* に冠してよいものではなかつたと疑うた。

- (10) 『チ古文』p. 2, TGT, p. 502b.